

今月のみことば

H.O

ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。権威が彼の肩にある。その名は「驚くべき指導者、力ある神 永遠の父、平和の君」と唱えられる。
(イザヤ書9章5節)

むか～し、小さな村の修道院のそばに、4人のなかよし兄弟がすんでいました。子どもたちのなまえは、お兄さんのチア・大きい妹のトン・弟のダル・そして一ばん下のブー。4人のお父さん、お母さんは、修道院のはたけでたくさんのやさいをつくって、はたらいていました。

とってもまずしいせいかつでしたが、4人にとって一ばんのたのしみは“クリスマス”！でもそれは、24日でも25日でもなくて、12月の6日。サンタ・ニコラウスのおいおい日。子どもたちはその日に、ひとあしはやくサンタクロースからのプレゼントをもらえるのをこころまちにしていました。

4人にとって24日のイブのまよ中にはじまるミサは、ねむくてねむくて、あくびのれんぞくです。小さな妹・ブーはねむりこけてしまい、大きないびきをかきながら赤ちゃんのイエスさまをおむかえするのです。

ある年のクリスマスのこと、4人は修道院のシスター・ガブリエルから、大きなとくべつの“にんむ”をいただきました。それは、となり村にすんでいる目の見えないおばあさんを、4人でリヤカーにおのせして、よ中のミサにおつれすることでした。いつもなら4人ともとっくにねむっているじかんに、お兄さんのチアは、3人の妹、弟をのせて、おばあさんをむかえにいきました。

シスターたちと、チアの家族、そしてほかにすう人のおきやくさま。ひえきったさむいお聖堂で、イエスさまのおたんじょうをおいおいしました。なが～い、なが～いミサがおわって、みんなが外にでてみると、なんということでしょう！あたりは一めんのゆきげしきです。お月さまのひかりがゆきをてらして、あたりはふしぎな明るさです。“ホワイトクリスマス！”。みんな大かんげき。

まだ、だあれも足あとをつけていないゆきみちを、4人はおばあさんをリヤカーでおくっていきました。かえりみち、4人は、ほんのすこしだけれど、人のおやくにたてたことで大まんぞく。大きなこえで、ジングルベルをうたいながら、ゆきあかりの中、家にかえっていきました。

小さな妹がいいました。“おばあさんにも、ゆきが見えたかなあ！？”

このよる、くらやみの中にいたおばあさんにも、すくいぬしイエスさまの光がかんじられ、まっ白なゆきげしきがたしかに見えたのでした。

生徒の心に語り掛けたいこと

数学科 C.M

クリスマスが近づき、街も、赤や緑のクリスマスカラーに包まれていますね。皆さんはクリスマスにはどんな思い出がありますか。サンタさんからのプレゼントを心待ちにしていた人もいたのではないのでしょうか。私も子どもが小さい頃は、サンタさんへ一緒に手紙を書き、ポストに入れたのを思い出します。クリスマスイブの夜は、サンタさんにクッキーと飲み物を用意し、ありがとうの手紙とともにテーブルにおいて布団に入り、サンタさんが来るまで起きて待ってる、という娘を寝かせるのに苦労したものでした。イエス様を待ち望むのとは違いますが、目に見えない大きな存在をワクワクしながら待っている娘と過ごす時間は、楽しく、かけがえのない時間でした。

さて、皆さんはもうクリスマスの本当の意味を知っていますね。今年は、中1によるクリスマススタプロで、聖書からイエス様の誕生の場面を再現しましたが、改めてクリスマスの意味を考える機会となりました。クリスマスには、プレゼントをもらう楽しみの日だけでなく、家族や友人と一緒に過ごせる幸せを喜びあったり、周囲の人に親切にしたりされたりしながら、キリストの誕生を祝う日になればと思います。それに加え、私たちの周りで困っている方、支援を必要とされている方に何かできることはないか、周りに目を向ける機会にもなればと思います。この時期になると思い出すが、数年前に聞いたシナピスの松浦さんのお話です。シナピスでは、難民や日本に暮らしている外国の方への支援を行っているそうです。そのお話の中で、難民は外国で起こっていることではない、日本に、身近なところに難民の方がいるということでした。中でも印象に残っている言葉が、「困っている方がいるということを知ったからには、黙ってはいられない」という言葉です。学園でも色んな奉仕活動の呼びかけがあります。親の日、お米の日やオールメル、ペットボトルのキャップやクリスマス献金など様々ですが、支援が必要な方のことを思い、それぞれが自分ができることを差し出し合える、そんな待降節のときを過ごせたらと思います。自分のところと向き合いながら、愛徳学園の仲間はもちろん、関わる人みんなに優しい気持ちで接するクリスマスを迎えられますように。

